阿岐のまほろば Vol. 14

金堂は何処に

史跡安芸国分寺跡（西条町吉行）

写真１　推定金堂跡で見つかった大規模柱穴列

西条町吉行の史跡安芸国分寺跡では、平成10年10月から12月にかけて金堂跡と推定されている箇所をふくむ３箇所の地点で発掘調査を行いました。

金堂跡の発掘調査は宗教法人国分寺の本堂建替に伴って行われました。

史跡安芸国分寺跡では、平成９年度の発掘調査において回廊の一部など、注目すべき発見が相次いでいます。そしていよいよ今回は、寺院において最も重要な施設である金堂に大規模な調査のメスを入れました。また寺院を取り囲む塀などの施設を確認するために、史跡指定地の北側に２箇所の調査地点を設けました。

消えた金堂跡

金堂と推定される地点には、建物基礎である「基壇」の一部と見られる土の高まりが存在していま

史跡安芸国分寺跡位置図（1：50,000）

した。

しかし調査の結果、近世の盛土であることが明らかになり、その下から柱を据えた礎石や、土をサンドイッチ状に突き固めた「版築」とよばれる基礎工事の痕跡が見つかるものと期待されました。しかし礎石は全く見つからず、版築もごくわずかしか見つかりませんでした。この他に調査区内からは建物の排水用と見られる溝や建築用の足場を固定したのではないかと見られる穴などが見つかりましたが、いずれも用途を断定できるような残り方ではないため、今後も性格を検討してゆく必要があります。

写真２　北側調査地点の溝（破線内側が一本になる溝）

この地点で注目されるのは南北に延びる大規模な柱穴列で、柱穴の大きさは直径約１m、深さ約0.5m以上を測り、かなりしっかりした柱が立っていたと思われます（写真１）。金堂との関連や時期などは明らかになりませんでしたが、果たしてこの柱穴列にはどのような施設が何のために建てられていたのでしょうか。

溝を埋める瓦類

北側の２箇所の調査地点では西側が北に振れた２本の溝が平行して見つかりました。このうち調査区南側に位置する溝は一本につながっていると見られます（写真２）。また、溝と溝の間には柱穴が見られることからここに塀などの目隠し的施設が存在していたかもしれません。

溝からは多量の瓦類や９世紀中頃（平安時代初期）の土器類が出土しており、青銅製火舎香炉の脚と見られる部分なども出土しています（第１図）。

第１図　青銅製火舎香炉復原図

金堂は存在したのか

では、金堂跡と推定されているこの場所に古代安芸国分寺の金堂は存在していたのでしょうか。版築は規模の大きな建物に用いられる特殊な基礎工法であることから、この場所に金堂クラスの大きな建物が存在していたことは間違いないようです。しかし建物の性格を判断する材料がほとんど見つからなかったため、結論を出すのは難しく、金堂をはさむように立地する講堂跡や中門跡の調査結果と照らし合わせて慎重に結論を出してゆくべきでしょう。

また、大規模な柱穴列と金堂との関わりも明らかでなく、今後に多くの課題を残した調査となりました。　（中山）

上三永の平城とその後

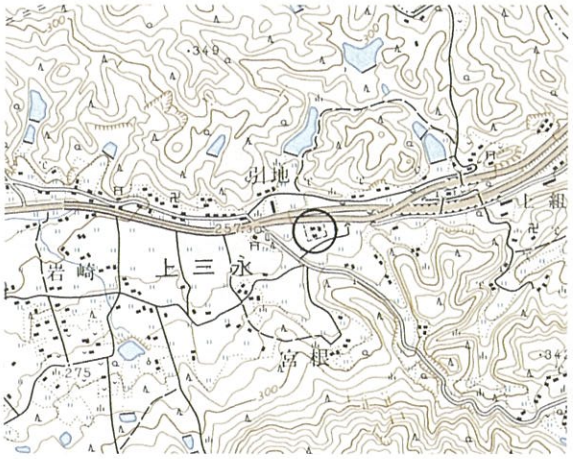
荒谷土居屋敷跡（西条町上三永）

荒谷土居屋敷跡全景

荒谷土居屋敷跡は、西条町上三永に所在する遺跡です。耕地整理に伴って、平成10年９月から10月まで土居屋敷の外側に当たる南側を発掘調査しました。

調査の結果、土居屋敷跡の周囲を巡る堀跡の一部と江戸時代前半の屋敷跡、奈良・平安時代の集落があったことが明らかになりました。

荒谷土居屋敷跡は、一辺約50ｍのいわゆる方形居館跡です。周囲には、3～5ｍの土塁が巡り、以前の調査で堀があることも判っていました。今回は、土居屋敷跡の正面に当たる南側の水田を調査しましたが、その結果、水田面で、幅約８ｍ、深



荒谷土居屋敷跡位置図（1：25,000）

荒谷土居屋敷想像図

さ約3mの規模を持つ堀を確認することができました。土塁の高さは約5mありますから、堀の底から土塁の上までの高さは約8mもある、とても堅固な造りになっていたことが判りました。このように堅固な防御施設（ぼうぎょしせつ）を持つ遺跡は、十分平城と呼べるものでしょう。

この城跡は、江戸時代になると庄屋（しょうや）さんの屋敷になったようですが、堀の外側は、一部が造成されて宅地になりました。

見つかった建物は、中心になるものが、南北約8m、東西約4mで、その他に小さい小屋のようなものが2棟ほどあったようです。どのような人が住んでいたのかわかりませんが、すべての建物が土居屋敷と方向を揃えており、土居屋敷の堀の際で、しかも門のすぐ脇に位置することから、土居屋敷跡に住んでいた人と関係の深い人の住まいだったのでしょう。

この建物はそう長くは続かず、18世紀の前半には取り壊されてしまいます。そして、堀も埋められて水田になったようです。こうして現在見られるような土居屋敷跡と周囲の景観が出来上りましたが、その時代は江戸時代の半ば頃だったのです。西条盆地は、水田が美しく広がる豊かな地域ですが、その景観がいつ形作られたかは、十分検討する必要があるといえるでしょう。　（吉野）

㈶東広島市教育文化振興事業団　文化財センター報
阿岐のまほろば Vol. 14
発行日　1999（平成11）年3月2日
編集・発行　財団法人東広島市教育文化振興事業団/文化財センター
東広島市西条町大字馬木541－1
TEL　0824－25－3880　〒739－0033
印刷　電子印刷株式会社
広島市中区堺町1－1－5